

氏名	マダ シゲキ 前田 茂樹
学位(専攻分野)	博士(工学)
学位記番号	博 1 2 1 9 号
学位授与の日付	令和 8 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学位論文題目	「つくる」と「つかう」の循環構造に立脚した公共空間の設計手法の実践的研究
審査委員	(主査) 教授 角田 暁治 准教授 木下 昌大 教授 高木真人 京都橘大学教授 長坂 大

### 論文内容の要旨

本論は、建物の竣工時点を「完成」とみなすのではなく、利用者や運営主体の相互の関与によって空間と制度が変容していく「循環的な営み」として公共空間を捉えなおす実践的研究であり、筆者が設計した 5 つの公共空間事例（＜高浜町 6 次産業施設 UMİKARA＞、＜三宅町交流まちづくりセンター MiiMo＞、＜徳島県立東部防災館おきのすインドアパーク＞、＜シーパスパーク＞、＜箕面船場阪大前駅エントランス＞）を対象として、「つくる/つかう」の循環構造に立脚した公共空間の設計手法を明らかにするものである。少子高齢化と人口減少が進行する日本社会において、財政・人材の両面から従来型の公共建築の持続可能性が揺らぐ中、市民を単なる利用者ではなく協働主体として位置づけ、設計・運営・利用の往復を通じて公共空間をともに育てていく新たな枠組みと、その実現のための設計手法とマネジメントのあり方を提示することが、本論の目的となっている。本論が着目するのは、設計開始以前のプレ・デザイン段階から始まり、基本・実施設計を経て工事監理へと至る、従来の一般的な設計プロセスにとどまらず、建物の竣工・開館・供用後の運営・利用の段階を含めた一連の時間軸における、「つくる」と「つかう」の呼応・往復による空間と制度の変容の状況である。とりわけ、計画段階から周縁的なニーズや利用者の小さな試みの芽を取り込み、利用者自身が、オープン後に小さな工夫や実践を重ねていくことによって、「つくる主体」と「つかう主体」が分断される以前に存在していた公共性をつなぎ直すことで、公共空間を持続的なコモンズとして育てていくプロセスを明らかにすることを目的としている。

本論の意義は三点に整理される。第一に、「つくる/つかう」の循環を通じて空間構成と運営ルール（制度）がどのように連鎖的に変容してきたかを、各作品事例の具体的プロセスとして分析・記述する点である。第二に、利用者や運営主体が関与することで生じる創発的な共創が、時間の経過とともに場の性格や機能を変えていく過程を、ギブソンの生態学的知覚論やインゴルドの関係論的世界観等を援用して理論的に位置づける点である。第三に、これらの知見を、筆者自身が設計者および指定管理者として関与した事例に適用し、「つくる/つかう」の循環構造に立脚した設計手法として枠組み化するとともに、それを可能とする具体的な空間構成やディテールの在り方を示すことで、人口減少社会における公共空間の再編に対する実務的な指針を提示する点である。

第 1 章では序論として、研究の背景、目的と意義、対象と方法、主要概念の定義、本論全体の

構成を示している。第2章では、高浜町において筆者が設計した<UMIKARA>をはじめとしたいくつかの建築作品の分析を通して、「つくる/つかう」を不可分の循環プロセスとして捉える視座に至った経緯と、その契機となった筆者自身の具体的経験について述べている。第3章では、「つくる/つかう」の循環を理論的に支えるために、近代的知覚論の系譜をたどり、「環境/人間」および「つくる/つかう」を一元的に捉えようとする諸思想を整理している。第4章では、本論に関連する知見として、鈴木毅、青木淳、前田圭介、槇文彦、ドミニク・チェンらによる、人間と環境の関係を動的に捉える既往理論を整理している。第2章から第4章で得られた知見と視座から、「つくる/つかう」を分断された機能ではなく、小さな試みの反復とその相互作用により空間と制度が連鎖的に変容していくプロセスとして捉え直し、次章以降の事例分析において創発的共創を読み解くための理論的基盤を構築している。第5章では、奈良県の<三宅町交流まちづくりセンター MiiMo>を対象に、従来は別棟で運用されてきた複数の社会教育機能が一つの公共空間内に同居する複合建築において、「つくる/つかう」の循環構造がどのように具体化しているかをソフト・ハードの両面から明らかにしている。とくに、開館から3年を経た段階で実施した利用者アンケート、関係者インタビュー、議会議事録の分析を通じて利用者や運営者の行動・意識の変容を検証し、<MiiMo>における日常的な利用実践そのものが、小規模自治体におけるコモنزのあり方を更新していく循環的プロセスとして機能している構造を明らかにした点は、本論の重要な成果である。あわせて、筆者が経験をもとに培ってきた造形感覚にもとづく空間構成や各部のディテール・デザインが、本論の骨子である循環構造を導いていることの明示は、建築設計の視点から見た本研究の意義として位置づけられる。第6章では、徳島新聞社の印刷センターのコンバージョンである<徳島県東部防災館おきのすインドアパーク>を対象に、「つくる/つかう」の循環構造を公共建築内部に組み込む設計手法を検証し、その独自性を示している。筆者は建築家としての独自の視点から、かつて巨大な輪転機が設置され、多くの冗長な余白を持っていた既存建物の空間特性を読み解き、ここだからこそ可能となる多様な活動の想定と、それを実現するための多重的な余白のデザインによって、循環構造の実現を担保する固有性の高い空間を構築したことは特筆に値する。また、筆者自身が指定管理者として運営にも関与し、「つかう」側の役割も担うことで、設計段階で用意された余白空間が実際の利用やマネジメントを通じて活用・調整されていく具体的なプロセスへの言及は、新たな知見である。第7章では、大阪府泉大津市の<シーパspark>を対象とし、設計段階から市民ワークショップを重ねて形成された「かたち（空間）」が、開園後の官民連携による運営調整を通じて、市民の「うごき（活動）」やそれを支える「しくみ（制度）」と結びつきながら年々更新されていくプロセスを、公園という都市スケールで検証している。ここでは、時系列的に生み出される様々な活動を拒否することなく、建築と公園の一体的な利用における多様な活動が、建築空間とランドスケープの連続的できめ細かなデザインにより担保され可能となっているが、このことは様々な活動を包含して生き活きと使い続けられるための今後の公園の在り方に対して、極めて重要な方向性を示している。第8章では、<箕面船場阪大前駅 エントランス>を対象に、ヤン・ゲールが提唱する都市空間における任意活動を生む公共空間の「エッジ」の質に着目し、ギャラリーやカフェに付随する余白空間を、通過動線と任意滞留の双方を許容する場として設計したプロセスを分析している。とくに、単なる余白ではなく、活動を誘発するための空間が持つべきスケールや他の要素との関係性の提示などを通して、土木領域に属する道路空間における「つくる/つかう」の循環構造の実装の可能性と、それを実現する空間の

構成についての知見を明らかにしている。第 9 章では、「つくる/つかう」の循環構造にもとづく公共性を利用者・住民の側に差し戻し、本来の意味でのコモンズとして持続させることが、人口減少社会における小規模自治体や地域コミュニティにおいて、公共空間を「共に作り続ける場」へと転換しうることの可能性について論じている。そして、そのような転換を支えるために求められる制度設計や、建築家・行政職員・市民といった各主体の職能のあり方、すなわち公共空間の設計・運営における新たな役割と責任の分有の在り方について、展望的な考察を加えている。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、これまでの公共建築が、建築家や設計者といった<つくり手>とそれを利用する一般市民などの<つかい手>が分離された関係性のもとでつくられ、そして運用されてきた状況の問題点に着目し、その両者相互による提案と対話を重ね、その結果を空間へ反映するという循環構造の重要性を明らかにするものである。さらに、両者による「つくる/つかう」という二つの行為が、相乗的・継続的に建築を変化させていくプロセスの分析により、持続可能性が高い公共建築を実現するマネジメントの枠組みと設計手法を提示するものである。多くの公共建築が竣工後は設計者の手を離れ、その運営は運営者のみに委ねられることにより、運営とともに明らかとなる様々な問題や状況の変化に対し、それらへの対応がフィードバックされずに使われ続ける状況に置かれている。これに対し本研究では、建物利用とともに時系列的に発生する使い手による小さな試みに着目し、それらを、建築を更新し続けるエンジンとしてとらえて空間構成に再反映することで、建築を竣工時に完成するスタティックなものではなく、常に更新され続ける「描き続けられる線」としてとらえ直すものである。また活動の発生を促し、変化を受け入れる可能性が担保された空間とはどのようにして獲得されるのかという命題に対して、筆者は自身が設計者であるという視点から、具体的で示唆に富んだ空間構成の方向性を示すことに成功している。さらには、その様々な更新の継続を可能にする担い手や、その担い手の裁量や空間への再反映を正当化する制度の存在が不可欠であることにも着目し、分析対象としている建築や空間において、「つくる/つかう」の循環構造をバックアップしているしくみの構造と可能性を追求し明らかにしていることも重要な知見である。この視点をもとになされた本研究は、筆者が設計した建築作品を分析の対象として、その特質を「空間」「担い手」「制度」を切り口として整理しながら、それら相互の関係性を丁寧に読み解き、動的な変化を可能とする新たな建築の在り方と、従来の設計・運営のプロセスでは実現できなかった、サステナブルでインタラクティブな公共空間の設計手法を提示したものとして高く評価できる。

審査会においては、審査員からの意見として、各プロジェクトの時系列上の進行において、「空間」「担い手」「制度」の三者をもとにした「つくる/つかう」の相互の関係性が、どのように推移してきたのかを示すダイアグラムを、分析対象作品ごとに示す必要性が指摘され、本論に追記された。これにより、筆者の提示する三者の関係性とその効果を、各プロジェクトの特性とともに、より立体的に把握することが可能となった。

なお、本研究は以下の 5 編の公共空間事例を中心として構成されている。いずれの事例においても、筆者はプロジェクトを牽引する建築設計者の筆頭として参画したものであり、権威のある

建築専門誌へ掲載されるとともに、複数の建築および空間デザイン賞を受賞している。

第2章：

「高浜町6次産業施設 UMIKARA」, 前田茂樹, 『新建築』, pp.156-163, 2021.12, グッドデザイン賞 2021 (日本デザイン振興会), 2021, 日本建築家協会優秀作品選 2022-2023 (日本建築家協会), 2022

第5章：

「三宅町交流まちづくりセンターMiiMo」, 前田茂樹, 『新建築』, pp. 138-147, 2023.11, 大阪建築コンクール奨励賞 (大阪府建築士会), 2023, 日事連建築賞奨励賞 (日本建築士事務所協会連合会), 2023

第6章：

「徳島県立東部防災館おきのすインドアパーク」, 前田茂樹, 泉真治, 『新建築』, pp.148-155, 2023.9, グッドデザイン賞 2024 (日本デザイン振興会), 2024

第7章：

「シーパスパーク」, 前田茂樹 (建築設計者), グッドデザイン賞 2025 (日本デザイン振興会), 2025, 土木学会デザイン賞優秀賞 (土木学会 景観・デザイン委員会), 2025

第8章：

「箕面船場阪大前駅エントランス」, 前田茂樹, 中西富仁広, 『新建築』, pp.134-143, 2024.4, グッドデザイン賞 2024 (日本デザイン振興会), 2024, 大阪建築コンクール奨励賞 (大阪府建築士会), 2024, Sky Design AWARD (Merci Media), 2024, iF DESIGN AWARD 2025 (iF DESIGN), 2025